

ほのぼの

第58号

令和3年

7月

発行

信行寺門信徒会

神戸市須磨区戎町1-2-3

TEL.078-732-5209



「ご縁をいただいで」

住職

コロナ騒動がはじまってから約一年半。ようやく高齢者から国民一般へのワクチン接種が始まりました。「ステイホーム」が唯一の感染防止対策のように報じられてきましたが、感染防止も次の段階に移った模様です。接種するか否かは個人の自由意思です。最初は接種の予約が殺到し、受付に手間取ったようです。担当者の方も大変なご苦労でしょうが、受ける方も覚悟がいるような感じです。

「しない」と言う人もいます。また「どうしようか」と迷っている人や、知人に「あんたどうする?」と聞いて「それなら私もそうするわ」と他人まかせにしている人もいます。いずれにせよ、世界中が未知のことですからそれなりに大変です。その結果は自分に来るのですから。

忘れてはならないのはコロナに関係なく、この世に生まれてきたものは必ず死ぬという事実です。それは「いつの日か」ではなく「いつでも」です。

「今日とも知れず、明日とも知れず」です。逃れることはできません。食べたらずなないと思ひこんでいます、食べておりながら死んでいくのが現実。コロナにかかっても、かからなくても自分の寿命が尽きる時は必ずくる。死すべきいのちを生きねばならない事実は「生から死を見て、死から逃げることはかりを考へるのではなく、死から今日の生を望んで生きていきなさい」という仏の聲に耳を傾けたいものです。

いつまでも元気でおりたいのにそれがかなわない我が身だからこそ、今日の一日は大切です。一回限りの一日です。はかなく散る桜であればこそ、今のひと時を咲いている花の美しさと同じです。私たちの欲望は、いのちを「生と死」に分けてしまひますが、「生と死は一如である」とは仰せられます。コロナ問題は大きな課題を私たちに知らせてくれています。

いのちは、先祖や親から与えられたものです。自分の意識で選んだではありません。縁の身です。出会った縁によって生きる世界です。こどもを成長させる力も、老いて、死に誘う力も同じ「いのちのはたらき」です。

生老病死という無常の境涯の世界にいるわが身は、たえまなく動き続けている「いのちの世界」です。そこに生きている私たちに「死ぬいのち」ではなく「生まれるいのち」に転じてくださるのが阿弥陀さまです。

みなさんもよくご存知の良寛さんは禅宗の人でしたがお念仏を喜ぶ妙好人でした。

「愚かなる身こそ なかなかうれしけれ

弥陀の誓いにあうとおもえば」

と「大愚良寛」と号された心境をうたっておられます。阿弥陀さまの誓いの中に抱かれている良寛さまは「自身を知らされた喜びの世界をうたわれたものです。

因は同じでも縁が変われば果も変わります。これまでの縁によって私たちの今の姿があります。過去は過ぎ去って無くなったのではなく、今の姿に過去が現れていきます。

「死ぬる身を 死なぬ身の なむあみだぶにしてもらい

ご恩うれしや なむあみだぶつ」

妙好人浅原才一さんの詩です。いつも南無阿弥陀仏と二人づれですね。

「師主知識の恩徳・」源信僧都



副住職

今回は七高僧のうちの六番目、日本の源信僧都（源信和尚）をご紹介します。九四二年に奈良県の当麻の里で誕生され、十三歳で出家されて比叡山の良源に師事し天台宗の教学を修められました。若くして並外れた学識を認められた源信僧都は皇太后の前で講義をすることになります。その時に褒美として頂いた布施の品を喜んでもらえると思いが故郷の母に送ったのですが、意外にも母親は次のような歌を添えて送った品々を送り返されたのでした。

「後の世を渡す橋とぞ思いしに、世渡る僧となるぞ悲しき」

世間的な名譽を受けることよりも、仏教の真実を求めて遁世修道することこそ母の願いであったと思ひ返した源信僧都は朝廷からいただいた僧都の位も返上して、比叡山の横川に隠棲して念仏の教えに帰依されました。四十四歳のとき「往生要集」を著され、煩惱に満ちた迷いの世界であるこの穢土を厭離して阿弥陀如来の浄土を欣求すべきことを勧められました。その「往生要集」の中に「われまたか

の撰取のなかにあれども、煩惱、眼を障へて、見たてまつることあたわずといえども、大悲倦むことなくして、つねにわが身を照らしたまふ」と記されています。つまり「煩惱に眼がさえぎられて、阿弥陀如来のお救いの光をみることもできないけれど、如来さまの大きなお慈悲は休むことなく常に私を照らしてくださっている」という意味です。正信偈や教行信証、高僧和讃などにもくりかえしあげられていますので、親鸞聖人がいかにこのご文を大切にされていたかが知らされます。

また正信偈には「極重の悪人はただ仏を称すべし」というお言葉が加わっています。如来さまのお慈悲の光明は私たち煩惱にまみれた凡夫には見ることはできないけれど、お慈悲のはたらきは南無阿弥陀仏のお念仏となって常に私の上に現れてくださっている、と親鸞聖人は味わっていました。

源信僧都は晩年にいたるまで隠棲修道にいそしみました。が、七十五歳で浄土に往生されました。親鸞聖人は源信僧都のことを、かつて靈鷲山でお釈迦さまが大無量寿経のご説法をされたときに聴聞された弟子の一人であり、衆生を教化する縁がつきたので、お浄土に帰られた方であったと敬われています。

濱田勝己仏像彫刻展

昨年、住職の弟である仏師濱田勝己さんの
 仏像彫刻展を行いました。今年、永代経法
 要に合わせて二回目の展示会を行いました。

阿弥陀如来像



釈迦如来像



大日如来像



薬師如来像



仏像は大きく4つのグループ（如来・菩薩・明王・
 天部）に分けられます。今回展示した如来について説
 明します。如来は悟りを開いた者のことを意味しま
 す。螺髪（らはつ）と呼ばれる頭髪が特徴的です。衲
 衣（のうえ）と呼ばれる粗末な衣一枚だけまとい
 ます。また、印相（手の形）や持ち物、光背に注目し
 て鑑賞するのも面白いです。



薬壺



本願寺派の光背



大谷派の光背

第二十回門信徒会総会

令和三年四月二十四日（土）、総会が行われました。

参加者には、多田さんから小皿の焼き物、神戸祭典さんからやわらか焼とお茶をいただきました。

新田会長の挨拶の後、昨年度の事業報告、今年度の事業計画案、会計報告、予算案の提案がありました。昨年度はなかなか例年通りの実施ができず、今年度も、花まつりは中止となりました。予算案では、神戸護法会の現状をふまえて、必要がある場合は、門信徒会から不足金を充てることが承認されました。また、今年度は役員改選の年のため、新役員の発表がありました。

今年度も皆さんのご協力・参加よろしく申し上げます。

「神戸護法会」のあしあと

坊守 米田 弘子

現在の「神戸護法会」のご法座は外部のご講師と信行寺住職が毎月第一日曜日、二時から開催しております。

今から五十四年前のことです。私は信行寺を継ぐことになり、大阪にある「行信教校」へ勉強に通いました。その

ご縁で、行信教校の専精会神戸支部の法座を信行寺の本堂で、会員制の形をとり独立した会計で運営することになりました。

しかし、会員の減少で続けることが厳しくなり、二十年后には解散しました。その時、この後どうするかについて信行寺の世話人と相談しましたところ、これまで続いた法座を減らしたくないということになりました。そこで、信行寺の壮年会と婦人会の世話人が中心となり、平成三年「神戸護法会」という新たな名称で発足し、信行寺の法座活動の一環として今日まで続いています。

昨今は会員の高齢化による減少やコロナウイルスの感染拡大にともない、削る所は削っても運営に支障をきたしているのが現状です。末永く安定して「神戸護法会」の法座を続ける方法として、門信徒会から不足金を充てることを先の門信徒総会で了承いただきました。また、信行寺総代様より、格別のご協賛をいただきました。深く御礼申し上げます。

門信徒会の皆様の「神戸護法会」への入会参加もお待ちしています。

法語カレシダ



老いが病が死が
私の生を
問にかけている

今回は、十月の法語を紹介しします。二階堂行邦さんの言葉です。

お釈迦(しゃか)さまは、老病死を見て出家(しゅっけ)を決意されたと伝えられています。『大無量寿経』というお経の中には、次のように説かれています。

人間として生まれた限り、どんな人も老(お)い、病(や)み、死んでいくことは避けられません。そのことを、「世の無常」という言葉は教えています。他人事(ひとごと)ではなく、私の身の事実です。ただ、老病死を知っていることと、わが身の課題となることは違います。老

病死がわが身の課題になった時に、初めてその身をどう生きていくかを問い尋ねていく歩みが始まることを、お釈迦さまの出家という行動は教えているのです。

他人の年老いていくこと、病気をしていること、死をむかえたことを自分のこととして考え、わかっているつもりでも、実際に自分の身に起こった時、分かっているつもりだけであったと気付かされることでしょうか。

できるだけ若く、健康で、長生きしたいというのは、多くの人が願っていることです。しかし、誰も老病死を避けては通れません。ですから、私たち一人ひとりには、老病死の身の事実をどのように生きていくかという大きな課題があるのです。そのことを教えているのが、「老いが、病いが、死が、私の生を問にかけている」という「これでいいのか?」という言葉ではないでしょうか。

人間は苦しみを避けて通りたいと考えます。しかしながら、どれだけ体力をつけても、勉強をしても避けられない苦しみがあります。避けられない苦しみを避けようとしても苦しみが増すばかりです。苦しみを受け入れていかねばなりません。



日頃の疑問を考えよう

Q 子どもは、娘だけで、結婚し嫁にいつています。今後親が亡くなった場合、仏壇はどうするべきでしょうか？



A これから多くなる難しい問題ですね。まず結論からいって、こうするべきだという答えはありません。

仏壇は長男でなくても、亡き人を偲ぼうとする方も、家族の皆が心通わすことが大切だと思われる方も、一人住まいの方も、長男も、末っ子も、男性も女性も、人間どんなスタイルであっても、生きる依りどころとなってくださる仏さまをお迎えするために、仏壇を自分たちの生活空間の中心に安置することができれば一番です。

日本古来の考え方でいうと仏壇に限らず家系にまつわるものは基本的に長男が継ぐというイメージがあります。しかし、少子化が進む中で、必ずしも男性がいる家庭ばかりではなくなっています。

女性しかいない家庭の場合、仏壇を誰が継ぐのか。女性は嫁ぎ先の姓に改姓することが多いですが、自分の夫が次男であるなど、仏壇を継いでいない場合、妻の家の仏壇をその家で継いでいくこともあります。

夫が仏壇を継いでいる場合、妻の家の仏壇も継いでいくことが必要となる場合もあります。そうすると、家に二つの仏壇となります。(違う宗派の仏壇を並べて置くと、仏様同士が喧嘩するという人もいますが、仏様は喧嘩しません。喧嘩するのは、私たち人間の方でしょうか。)どちらかの仏壇を処分して、一つの仏壇に過去帳などをまとめる、別々の部屋または階に仏壇を安置するなどの方法が考えられます。自分たちの代で終わらせるというのも一つの考えではありますが、誰もが両親、先祖がいて今私達が存在します。感謝を忘れず、よく親戚とも相談して、共通理解と了解を得ることが必要でしょう。



信行寺行事予定とご案内



今年度も、新型コロナウイルスの影響で、花まつりの中止など予定の変更を余儀なくされています。左記の予定も変更するかもしれませんが、確認の上、ご参加頂きたいと思えます。

◇本堂納骨お盆法要

八月十六日（月）午後二時〜

◇夏期特別法座

八月十八日（水）

◇秋の彼岸法要

九月二十五日（土）午後二時〜 副住職
二十六日（日）午後二時〜 住職

◇西大谷納骨参拝

十月十七日（日）

編集委員より

日常仏壇に向かつて合掌、「ナムアマミダブツ」と念仏を称えていた私。

8年前、妻はお浄土へ旅立ち、秋の彼岸法要に信行寺さんへお参りをし、「正信偈和讃」のお経を参拝者の皆さんと称えたのが初めてのお勤めです。

私はお経の称え方・教えを学びたく、「聞法の集い」に参加させていただき少しずつ理解できるようになってきました。お経の一字一文字の意味は深く、生きていく私達への教えがたくさん盛り込まれています。月一回、礼拝堂で「写経」も始めました。心静かに筆を運んでいる時間は、日頃の忙しさ・悩みから解放され、新たな気持ちに余裕をもたらしてくれる思いです。

コロナ禍で自粛疲れの日々が続き、お経を称えて心を癒すお寺参りをお誘いします。

南無阿弥陀仏
新谷 勝